

東北視察の感想

No.1 IM様

2日間ありがとうございました。とても勉強になる経験をさせて頂きました。震災後に訪問した際の面影もなく、伝承館、コンクリート、公園になっている姿にビックリしました。

伝承館では、テレビやインターネットで見る震災被害より、当時のリアルな映像(被害の状況や対策など)を見ることが出来ました。動植物が生活できないようなコンクリート建設、こんなに必要だろうかと思う伝承館。国が予算を何十兆円も付けて、国側が得意のパンフレット形式で県・市町村に助成してしまった結果なのでしょう。気仙沼の造船所も、何社かまとまったら(建設費50億以上)助成してもらえるとということで、新しい造船所が出来たそうです。復興予算も2030年まで延長され、このお金(税金)を若い子たちに背負わせると考えると今後の日本がとても心配になりました。

将来を考えた市民の声が大切であり、自分のことだけではなく、色々なものを見て、体験して、他者のため、地域のため、日本のため、地球のために考えて、行動することが大切だと感じました。

災害が増えていく今後に向けて、防災に強いまちづくり活動がより良くなるよう微力ながら協力させて頂きたいと思います。今後とも宜しくお願いします。

No.2 MR様

この10年間を定期的、定点確認の形で見て参りました。

「伝承館」と呼ばれるものが増え、いわゆる「レガシー」作りに移ってきている流れと、街はきれいになったが「人気(ひとけ)」が無くなる流れの同時進行を感じました。

○双葉町・東日本大震災・原子力災害伝承館

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構(イノベ機構)という組織が解らなかったので調べてみたら、民間を巻き込んだ国家プロジェクトですね。伝承館の展示には特に興味を惹かれるものではありませんでしたが、この施設をまずは「作った」ことが前進なのだと思います。

○大川小学校跡地

周辺道路も整備され、「レガシー」として整備されていくさま。今後どのような保存をしていくのか。荒浜小(震災遺構)や気仙沼の向洋高校(伝承館)のようになるのでしょうか。

○南三陸防災対策庁舎跡

特に注目していました。ここ数年、庁舎の周りが嵩上げされ、「どうなっちゃうんだろう」と思っていました。レガシーとして残す趣旨を理解しました。お金かかっているな～、という印象。

○気仙沼市伝承館(旧向洋高校)

校舎の外装があまりに奇麗でしたが、何と外装工事が終わったまさに引き渡し当日だったそうですね。吉田さんと一緒に、ボランティアの方に話を聞くことが出来ました。この女性は最初に見たビデオを撮った方の隣にいたそうで、本当に九死に一生を得た体験を話して頂きました。

○高田松原公園/東日本大震災津波伝承館

公園は広い。こんなに広くなくていいのに。お金かかってましたね。

伝承館は、今回の視察の中では一番見ごたえがありました。

やはり、特に「くしの歯作戦」は復興、そしてまちづくりの基礎に考えられるものとして腹に落ちました。

後は、皆さん仰る通り、何とも空しい白い防潮堤ですかね～(;^ω^)これは、結局は地域の住民に壁の「あり方」を委ねられており、「怖い怖い」と壁を作ってから「あちゃ～、こんなになっちゃうのか～汗」という地域も多いのではないのでしょうか。今後の教訓としたいです。2日間、ありがとうございました。

No.3 OK様

東日本大震災復興状況視察感想です。

野老会長は、お身内での不幸があったにも関わらず、今回の視察研修初日、ご案内して下さい、ありがとうございました。おかげさまで、被災地に何度も行かれていた実体験のお話を伺いながら現地を視察した結果、当時の状況と現在の景色とを、より深く結合させて考えることが出来ました。

昔から大きな災害が繰り返されているにも関わらず、その教訓が生かされず、また同じような被害を招いております。しかも近代社会となって、自然災害に加えて、人災ともとれるような被害も発生し、被害の状況がより大きく複雑化してきています。

東日本大震災は、未曾有の大地震、そして大津波、火災…等。多くの方が亡くなりました。財産を失い、大事な家族を失い、今までの普通だった生活が一変した。このような状況が伝承館で改めて確認出来ました。心に大きな傷を負った方々に対する大里さんの今も続く献身的な活動が、被災者に、いかに希望と

勇気を与えたかが、野老会長のお話しと相まって感動を交えてより強く伝わってきました。

大川小学校の遺構には、何かやるせない気持ちでいっぱいになりました。亡くなった生徒さんは当然ですが、あまり話題にならなかった引率の先生方の無念さも感じました。先生方にもご家族があったはずです。

気仙沼の伝承館では、被災した高等学校の遺構があり、自然のすさまじいエネルギーと恐ろしさを実感しました。屋上に行ったとき、時雨模様でしたが、大きな虹を見ることが出来て、何か前途に希望が見えたような気がしました。

岩手の一本松では、ものすごい広さの公園に圧倒されました。

今回の視察では、至る所に公園が出来上がっていたのも印象的でした……が。福島原発事故。目に見えない放射線により住民避難の悲惨さを当時の報道等で見聞きしていますが、被災地に入って、道路から見える被災地の廃墟住宅、今も続く除染作業、大きな黒いビニール袋の山に改めて人知を超えた原発事故の悲惨さと恐ろしさを感じました。当時私の後輩たちが死を覚悟した放水作業をしたことも思い出されました。いずれにしても、平凡な日常生活が、ある日突然亡くなったら、その今までの平凡と思っていた生活が、いかに大事だったかをさらに強く改めて思い知る事が出来ました。

私たち「災害に強いまちづくり大綱」の防災グループは「平凡な生活」がいつまでも続くことを祈って力を合わせていきたいと思っています。

No. 4 UZ様

こんばんは。皆様お疲れ様でした。駆け足で見てきた二日間を、今いただいてきた資料を見ながら、留守番をしていた主人に話し終えたところです。

10年前に、石巻湊小学校を中心に、色々な避難所を回らせていただけたこと、またこうして被災地を見に行くことが出来たことに感謝します。至る所に伝承館が出来ていて、また遺構として綺麗に残されていくことに、少々疑問に思っています。もちろん、後世に残し伝えて行かなければならないことは大事なことです。帰りのバスの中でも少し話しましたが、広場の平和公園も、もともと公園だったところに原爆が落とされたと思っている方がいるように、海の見えない防潮堤に囲まれたコンクリートの中では、果たしてきちんと受け止めてもらえるのか、心配しています。

私は、今まで見てきたこと。聞いてきたことをしっかりと伝えて行ける側になろうと思いました。最後に寄った気仙沼の伝承館と岩手の伝承館は、またゆっくりと行きたいと思います。10年前のボランティア最後のクリスマス会には、教員になった娘と当時の彼氏(今の旦那)一緒に行ったので、孫がもう少し大きくなったら、みんなでまた見に行きたいと思っています。

当時、戦後生き延びた自分たちだから気持ちを通じ会える、力になれると一緒に
行っていた方たちも次々と亡くなられ、復興の状況を見せてあげられなかつ
たこと、残念に思いました。震災から1ヶ月で、東北に行こうと誘ってくれた
真理子さん、本当にありがとうございました。貴重な体験が出来たことに感謝
します。毎回、大里の皆様にはお世話になりありがとうございました。

No.5 YY様

皆様二日間、ボランティア作業をこなしたとは驚きで思いますが、そこに住
む人には生業と安全のバランスがあるでしょうし軽々とはものを言えないです
ね。福島原発についても人間に与えた天の戒めかとも思いますがそれにしても
代償が大きすぎますね。エネルギーとして避ける事の出来ない両刃の剣と共存
するには冷静な努力を要しますね。不幸な出来事でしたが手厚い？援助を受け
られる事が出来る日本人で良かったとも思えます。考えさせられる貴重な体験
をさせて貰ったこの企画に感謝しております。

No.6 HYさん

皆様、東北被災地視察を無事終えて誠にありがとうございました。3.11から
10年を迎え復興と伝承までこぎつけたことはやはり小さな日本の国ですが、誇
れること、そしてたくさんの支えのおかげさまとつくづく思った次第です。重
度になった私がここまで被災地に来れるとは幸せなこと、障害のある人のあら
ゆる分野での参画が普通で当たり前のこと、
この災害に強いまちづくり、そして身近に活動を共にしている方々は実践して
頂いているので感謝とこれからも宜しくお願い致します。現地に行き学びの必
要さと帰ってから活かすこと目指して日々精進をお誓い致します。全国の道の
駅、その他関係のトイレに感謝、大切に使います。入りながら、こうした方が
もっと便利かなと思っています。何事も反省と開拓、誠心で皆様と共に前に進
ませて下さいませ。

No.7 SN様

<あの石巻も南三陸も気仙沼も陸前高田も海の見えない街になっていた?!そ
の1>

ある女性社長を含む数人で、プリウスにて常磐道を北上。もちろん、あの原
子力災害の大熊町も双葉町も浪江町も、そして、津波災害の爪跡を大きく残す
三陸の街々も。あれから10年経とうとしてるわけだが、まだまだ、街の復興は
途上。どの街でもブルドーザーやクレーンなどの土木機械が盛んに動き回っ
ていた。

震災の受けた街々には、様々な“震災遺構”があり、そのリアリティをそのままに、そして写真や動画も含めて残されていた。(お～10年前がフラッシュバックする)そして、あの海で栄えた街たちは“海の見えない街”と化していたのだ。石巻も、南三陸も、気仙沼も、陸前高田も。そう、海は高い防波堤に覆われていたのだ。川の河口も数百メートルに渡りコンクリート水路と化していた。え～、本当にこれでいいだろうか？そう言えば、ある知事が震災後、“高い防波堤を造る”と断言していた記憶が？！

任期の短い政治家は、自分の存在価値を高めようと深く考えず推し進めるわけだ。車で走っていると海はほとんど見えない。街に降りてももちろん海は見えない。街に降りてももちろん海は見えない。これって美しい三陸海岸の街であり、漁師の街としてはどうなんだろう。そしてこれら震災を受けた街々は、当然だが被害の及ばないだろう地域にセットバックしているというのに。そしてそしてだ……。こんな大きな津波の可能性は数百年に一度。これらコンクリート堤防の耐久性は何と約50年だという。えっ？！何かズレている気がするのは私だけだろうか？！

<あの石巻も南三陸も気仙沼も陸前高田も海の見えない街になっていた？！その2>

その女性社長が震災直送後から少しでも助けになろうと何度も何度も通ったことで繋がった被災地の人的ネットワーク。そのお陰で、現地の方々とお会いし、直接お話しすることが出来た。まさに被災地の生の声である。漁協の組合長でもある漁師の方は・・・「オレたつは、海の波の音を聞き、その海を見てその先を予測するわけだから・・・困ったもんだ。海からけえっててくると、コンクリートの堤防と塀しか見えないさ」その声こそが、この地域の人たちの「震災遺構」なのではないのか。あれから10年。私たちの記憶の奥の方に行ってしまった東日本大震災。現地の人たちの“震災”はまだまだ続いている。「あれから10年、震災の地を、その現実を見に行こう！」もしかしたら、帰ってきたその日から私たちの“仕事”の意味が、そして存在理由が変わるかもしれない。

No.8 K S様

おはようございます 昨日は大変お疲れ様でした。
震災10年を経て人間はどんなに頑張っても津波のような自然災害にはかないません。今までどおりエネルギーを使い続けるなら、たいへん難しいことですが世界中の人々が英知を結集し、原発に変わる事故等が起こってもすぐに人間が制御できるものを考えなければなと思います。最後に大川小を含めすべての震

災について、私たちが後世に伝えていくことが使命であると考えます。

PS 来月も宜しくお願い致します

No. 9 TY様

宿題の感想です。「2年半ぶりの南三陸。防波堤の高さとその味気なさに「安全を守る」ことの難しさを深く感じました。早く安全な場所にしなくてはならないと考える行政。住民の話をもっともっと聞き入れていけば、海と共存してきた今までの生活を護る方法はあったはず。現地の阿部さん達が訴えていったのに一一。という話を聞いて、本当に残念な思いでした。

大川小は数度目ですが、子どもたちはもちろんのこと、先生方のあの時の苦しみを思うといつも胸が痛みます。防災学習に活かさなければと奮い立ちます。すぐに現職の後輩に報告し、防災訓練や日々の子供たちの生活の仕方について話し合いました。会長さんの考え方や実行力にさらに感動しながら、今回も貴重な体験をさせて頂きました。ありがとうございました。」どうぞ宜しくお願い致します。

No. 10 MS様

笹原 桂子様 昨日はお世話になりました。心身ともに疲れしました。何も作業していないのに。昨日の旅で感じたことです。

- ① 南三陸 地上げの高さがよくわかりました。元の住民はどうしているのでしょうか？幸せにお暮らしだとよいのですが。漁業従業者はどのようにお暮らしでしょうか？
- ② 防波堤 嵩上げの高さが良く分かりました。これは住民の意見が取り入れられたものなのでしょうか？大いに疑問に思います。それは私がボランティア活動で聞いた漁業者(極少数の人の意見かも知れませんが)の言葉で、日常的に海の色、波の高さ風の方向、強さ等を観察して生活していると話されました。この高さになって日常的にそれが出来るとよいのですが。
- ③ 伝承館 事故後の事のみで原発の誘致のされ方、住民への発電所、それも原子力を使う特別な発電所の事をどのように説明したのかや、原発が厚生後世に残す問題があることを説明したのか、どのようにして受け入れられたこれを伝承するべきと思った。原子力発電所は発電と共にプルトニウムを生産する工場なのです。プルトニウムは害悪の象徴なのです。それを知らずに受け入れさせられたとしたら、住民は哀れです。プルトニウムの恐ろしさを知るには岩波新書「プルトニウムの恐怖」高木 仁三郎 著で学んで下さい。

No. 11 KH様

こんにちは。先日は、ありがとうございます。被災地に訪れた感想を送ります。

今回、被災地に訪れてみて、自分自身の目で直接感じた事が多々ありました。ですが、伝承館に貼られていた他県(被災地ではない県)の子供達からのメッセージの中に、「忘れないで」という言葉を見つけました。これが、被災地訪問の中で私が最も印象に残ったものになりました。

被災者の方々がどれだけ未来に伝えようとしても、私達を迎え入れる準備をしても、伝えられる人数、伝えられる想いは限られてしまいます。その中で、日本の過去にあった現実を、被害をあまり受けなかった人達がお互いに思い出し、忘れない努力をし、発信し合う事がどれだけ重要な事か知る事ができました。私も、そのような発信をできる人間になりたいと感じたし、今後震災を知らない世代が増えていく中で生きていく人間として、しなくてはならないとも感じました。そして、被害を受けた方の想いや命を大切に考える事は、私達が未来の災害に備えて準備をする事そのものであると感じました。私も、この文章を見て下さった方々に「忘れないで」と伝えたいです。

No. 12 AK様

9年前、土台だけになった友達の家があった場所から、いつもなら、松林で、見えない海が見えた！綺麗な海だった！こんな綺麗な海が、これほどの苦しみをもたらすのは、きっと、人々へ、警鐘を鳴らしているのだ！と、思った！原発事故の処理！高いコンクリートの壁！これは、海が求めている答えだろうか？復興！の言葉に、触れるたびに、疑問ばかりが湧いてくる！それにつけても、被災地に通いつけている大里の皆さんには、頭が下がります！もっともっと沢山の皆さんに、真理子さんの話を聞いて欲しい！被災地に、行って欲しいと、つくづく思いました！

No. 13 MB様

今晚は。東北視察に参加して！(11/26, 27)

外観ではある程度復興したかのように見える被災地、伝承館の数の多さにビックリ。まだまだ避難生活者は沢山いるはず、もっと生きたお金の使用方法はないだろうか？防波堤が高くて自然の景色や海が見えず残念。以上松原の感想です。2日間至れ尽くせりでありがとうございます。

No. 14 UY様

傾斜なら傾眼とも言うべき、

被災地大川小・南三陸・福島伝承館の視察させて貰って・・・・・・・・

今まで何度か彼の地を見てきましたが、10年目にして復興の手が迅速に動き始めた様子を見てほっとする思いと、逆に綺麗に整備され観光地化されていく姿を見るに付け、地元の復興には是非とも必要だけれど、特に初めて訪れる人には災害の悲惨さがどれ程伝わるのかなあ・・・という思いが強く湧いてきました。自然は厳しいものだ、命は脆いものだ！！とすることを強く自覚し、災害に遭わずに日々生活できる幸せを噛み締めつつ己の人生目標に向かって精いっぱい努力しようという思いを再確認させて貰いました。有難うございます。

No. 15 MT様

10月13日、14日、第二弾

全長1150キロの東北ツアーに無事行ってきました。福島の帰宅困難地区の現状、陸前高田津波伝承館、気仙沼線の乗車、南三陸防災庁舎、石巻大川小学校、松原の観光船などなど大川、鶴岡、森そして私の4人は、車中激論を交わしながら終始仲良くしっかりと視察して来ました。後日それぞれから報告があると思います。

南三陸は阿部弘さん、陸前高田は菅原みきさん、そして大川小学校は武山さんが現地に来てくれ、今回初めて行った3人に短い時間でしたが話をしてくれました。ゴーツーキャンペーンを利用した南三陸ホテル観洋のおもてなしも食事もおほんとうによかったです。

次回に伝えたい内容

- 1、1日目の冒頭の視察に、双葉町大熊町の帰宅困難地域の現状を見ることが出来て良かった。
- 2、船やバスは短い時間で良い。
- 3、現地の人の話を聞けるように作って欲しい。以上です宜しくお願いします。

No. 16 YM様

10月13日、14日、第二弾

拙い文章ですみませんが、お許し下さい。

スタッフの皆様大変な中お疲れ様でした。それから、真理子会長さん、気遣い頂きすみません。伝えたいこと2、3は百パーセント私の振り返りでした。

10年前もそうでしたが、今も。お会いすることが出来なかった今だからこそ、二日間現地で、色んな方の話を聞いて、被害にあった場所の人々の気持ちを受

け止めて味方になって上げたいと思いました。

双葉町では、被災付近の住宅がいくつもあり通行止めでそこに住んでる人も帰れないところだったり、除染した袋がいっぱい溜まってた場所があったりそこも通行止めでした。

陸前高田の津波伝承館というところでは、津波の映像を見せられその激しさ、人々はその当時を目の当たりにしていながらその無念に観ているしかないなどいうのを感じ取りました。一日目で会った菅野さんや二日目で会った武山さんになかなか会える機会も少ないとのことでしたので、態々会社の皆さんに会うということは、10年経ち割と状況も落ち着いて来たのだと思いました。他にも色々ありましたが、心に深く刺さり強く印象に残っていたのはこれらでした。直すところは、アワビ釣りなどの実技体験を通して被災を受けた現地の方とお話をするなどしてたら分かりやすく、話された震災当時の内容も頭に入りやすいような。そんな感じがしました。やっぱり南三陸ホテル観洋は宿泊される場所としてはおすすめしたいですね。

No. 17 S O様

東北研修

13・14日で東北研修に行かせて頂きありがとうございました。被災地付近に行くのは初めてでしたが、TVや話で聞くよりも実際に見ることはイメージしやすく現地に行くことは大事だなと思いました。

2日間で感じたのは10年経ってもまだまだ復興中だということでした。特に福島原発の除染作業は本当に終わるのか？という地道な作業です。しかし、やらなければ進まないの少しずつでも復興して家に帰れるようになればいいと思います。

宮城の津波被災地では、いたるところで護岸工事をしていました。

陸前高田や大川小学校では実際に当時被害に遭われた方の貴重な話を聞くことが出来ました。また、道中で真理子さんに当時のボランティア活動や出会い、復興状況を説明して頂き大変勉強になりました。貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。

No. 18 R T様

2020. 10. 13-14 東北

■特に心に残ったこと

・大熊や双葉などの帰宅困難地域で・・・今なお盛んに行われ続けている除染作業や、各戸入口に設置され続けているバリケードを目の当たりにして、日常生活を奪われる恐ろしさを思い知らされました。そして、前向きに歩む人々

がいて立て直されつつある生活はあっても、社会全体は事故後 10 年経過した現在も何も変わらず、まだ何一つ落ち着いてない様に感じました。

・病院で被災した菅原さん、漁師の阿部さん、大川小児童の父兄である武山さん・・・皆さん淡々と、特に明るく語ったり接したりして下さいましたが、被災時のご苦労や被災後の心情を考えると、こちらの胸もつぶれる思いでした。

■良かった所

・伝承館いわて TSUNAMI メモリアルのガイダンスシアター・・・震災後 TV で何度も津波映像が流されましたが、今回久しぶりに見ても、やはり衝撃的でした。この出来事を決して忘れてはいけないのだと思いました。

■気になった所

・JR 大船線 BRT と松島遊覧船・・・なかなか良かったのですが、もっと短時間なら更に良かったのではないかと感じました。

■感想等

・ずっとボランティアを続けている真理子さんに、頭が下がるばかりです。

・超長時間運転を担ってくださった真理子さんと大川さん、本当に有難うございました。お疲れ様でした！皆を気遣ってくれたり、会話を盛り上げてくれた森君、有難うございました。このような貴重な経験をさせて下さった大里に感謝致します。

No. 19 KA 様

あれから 10 年東北復興視察感想

莫大な税金を投入した東北復興の様子をこの目で見たいと参加しました。以前に街が人のざわめきがあったであろう跡地は 10 年経ってきれいに整備され、先人の方が石碑では伝えきれなかった津波の恐怖を、伝承館という形で目や耳から脳で感じる事が出来ました。特に 10 年前にあの体験の記憶があるかどうかわからない小中学生の修学旅行のコースには良いと思いました。そして観光地として地域にお金が落ちる仕組みが出来ました。交通インフラももう少しで完成するだろうと感じました。どのくらいの税金が投入されたのか分かりませんが、伝承館ロードとしての価値はあると思いました。

また、気仙沼と陸前高田では、これから 10 年かけて新しい街が築かれるだろうと感じた。但しそのためには雇用を確保する産業とセットでの必要性があると思う。陸前高田の広大な更地にどんな産業が出来るのか期待したい。

1 日目

最初に福島 of 帰宅困難地域を通り、福島第一原発のギリギリまで近づき工事のクレーンが見えた。まだ、放射能がレベルが高いこの地域で作業している人にありがたいと感じた。

原発伝承館では、報道にはない成り立ちから、放射能が多く漏れたのは第二号機だった事など知りました。語り部の人のお話も家財は放射能が高くて持ち出さないと聞いた。ルンバの様な新芽カッターも参考になった。

また近くの町にはさまざまな先端研究や開発の拠点が作られようとしていました。個人的には、自然エネルギー発電の一大拠点が出来ればいいと思いました。

大川小学校跡地も、あんなに山に近いのに犠牲者が出た事が残念でした。また、今は被災した状態の跡地しかない広大な土地に街があった事に驚きました。なぜあんな大河の河口に街を築いたのに普段から地域で洪水や津波の避難訓練などをしていなかったのかが疑問でした。

南三陸町は町の後地に人口の山と立派な橋が出来てました。観光以外の方向性が見えませんでした。

気仙沼はホテルで滞在しただけでしたが、新しいマンションや家が目立ちました。

2日目

陸前高田は元々が大きな町だったためか、街づくりの規模は他とは違っていました。山を削り、土を盛った高台の広大な住宅地、超高い防潮堤、整備された松林、広大な町跡の更地、真新しい津波伝承館がありました。地球のプレートと地震の歴史の事、ガレキを片付け車を通す啓開の話、旧気仙中学の避難の話が印象に残りました。

また、伝承館に入る前に会長が震災時に避難所で知り合ったコンノさんご夫婦に会いました。素敵なお夫婦でした。

残念だと思ったのは、新しい街なのに更地の中に電柱が点々としてました。運転しながら随所で、通い続けた東北ボランティアの話や原発などの見て体験した話をして頂いた会長に感謝申し上げます。

No. 20 T I 様

東北研修レポート

今、東北から帰る途中で福島を走行しています。今回の東北研修で学んだことを報告します。2日間ありがとうございました。

初日、福島の原子力災害伝承館、大川小学校、南三陸庁舎跡を視察。

2日目、中尊寺及び陸前高田を視察。10年前の衝撃を思い出す。津波により破壊された町。原発で人が消えた異様な風景。避難所での人々の生活。

遺族の悲しみ、、、、。

10年経ち、福島は原発で時間が止まったままの地域があるが、それ以外は今なお続けている土木や建設工事、税金の惜しみない投入により町は様変わりしていた。町のあちらこちらをコンクリートで固められて行く壁、次々に建てられている公共建築。そして復興住宅。違和感を感じずにはられない。

宿泊した蔵王山麓の温泉旅館は100年を超える建物で有形文化財になっていた。一番古いものは400年を超えていた。木、土などの人自然の環境に馴染む材料を職人の確かな技術で手間を惜しまずかけてつくられた日本建築は、年月を重ねて行くことで真新しいものにはない落ち着きを放つ。長い年月、人々を迎え入れ、自然の中で存在し続けることでできた荘厳な建物は、人を圧倒する。

またそこを訪れる人を思いつくられた空間は人々をやさしく包む。そこで歴史を感じながら思いを馳せる事はなんとも言えない心地よさだった。また中尊寺でも同じような事を感じた。

そこから思う事はコンクリートだらけで作られて行く被災地は10年後、50年後、100年後、、、どうなって行くんだろう。長い時間軸で物事を考えられなくなった日本人の問題点を考えさせられた。復興という名のもとに、目先の経済や権力にとらわれてつくられていく被災地の行末が心配になる。被災地で今なお続く工事の数々は、津波伝承館で掲げていた『命を守り海と大地と共に生きる』のスローガンに沿うものになっているのだろうか？目先にとらわれない100年200年、願わくばもっと先を見据え未来に繋げて行く生き方とは。今回の東北研修で考えさせられたこの事を実践のなかで答えを出していきたい。

NO. 21 MT様

東北研修 感想

1日目 双葉町 原子力災害伝承館、大川小学校、南三陸庁舎跡 気仙沼泊。

2日目 陸前高田復興記念公園 津波伝承館 松島見学。

双葉町 語り部の人の話 10年経っても荷物をとりにいけない人災の恐ろしさ、バリケードされた家、せいたかあわだち草の生えた田畑まのあたりにした。時は、止まっている。それでも頑張っている姿自分だったらどうだろう？

陸前高田伝承館では、津波の恐ろしさを復興の様子を見学、震災当時すぐにみんなの為に花植えをした人、農機具屋さんをすぐにブレハブで作って

営業したコンノさんご夫妻にお会いした。皆の為に夜まで灯りを灯していたお話なんと素敵なんだろう。

10年間通い続けたボランティア活動真理子さんの行動 みんなの信頼を感じた。どんな事があっても立ち向かう姿そうになりたい。人の為に何かできる人になろう。2日間有り難うございました。

No. 22 A I 様

東北研修を終えて

2年ぶりに宿泊したこと、知り合っ間もない方々と長い時間一緒であること、初めての東北への旅行であること。

大里では多かれ少なかれ毎日が初めて尽くしですが、今回はトップ3に入るスケールの初体験、という素敵な経験をさせていただいたことに、歴代の大里スタッフの皆様へ感謝の意を表します。本当にありがとうございました。とても充実した2日間でした。一生忘れない2日間です。

東北は私にとって、ずっと行ってみたい場所でした。知らぬは一生の恥だから。

- ・外を散歩しているひとがまったくいないこと。
- ・今もボランティアが必要であること。
- ・多くの地元住民が家に帰れないことに対して、強制的に慣れる状況に追い込まれていたこと。
- ・東北は関東と違い、地面の起伏が激しく、波の強さを助長すること。
- ・大手企業が復興に関わる半永久的な仕事を獲得していたこと。
- ・今も目の高さに海があること。
- ・人が死んでいたかもしれない地面を歩いたこと。
- ・被災者を救助した人と話ができなかったこと。
- ・家が津波で流され、自然が何物にも遮られることなく、折れた鉄骨が露わになった建築を横目に、その景色を「きれいだ」と思った自分がいること。
- ・破壊があるから創造があることを思い出したこと。
- ・新しい建築、瓦礫になった建築、骨だけ残った建築。色んなかたちになった建築が、そのままあったこと。

陸前高田伝承館で見た『引き潮』の映像を見て、すべてが自然に帰る様が、私のことを「悲しいとか、救いだとか、惨めだとか、色んな気持ちに連れていったことが、すごく新鮮でした。

東北の、私の好きなご飯と建築、どちらもとても素敵でした。
私は文字を読んで理解しないとわからない展示が苦手なので、この2日間の現場を踏まえて、考文献になりそうな書物を読むつもりです。まずは事務所にあるものから。
今現在、できるようにになりたいことに沢山の時間を費やしているため、やりたいことができない状況にあります。今回の東北研修を経て『東北に行ってみたく思えるような手書きのチラシ』を大里に並べてみたいし、それを関わったお客様に共有して、話の種にしたいと思っています。

No. 23 KK様

東北研修レポート

・概要

1日目：東日本大震災原子力災害伝承館、大川小学校、南三陸町防災庁舎、不忘閣。

2日目：中尊寺、陸前高田 東日本大震災津波伝承館。

・思うこと・考えたこと

大震災の時、高校生だった。あの時は、自分のこと、家族のことそれだけしか考えていなかったことを思い出す。姉貴は大丈夫か。ばあちゃん

は。
大震災以降、Youtubeで震災・津波の映像はよく見ていた。何年かたって、原発事故のTV会議映像が公開され、原発事故はどのような状況の中（東京電力・地方自治体・官邸間でどのようなやり取りがあったのか）起きたのかを見ていた。

がれきの山だった時から、どのように変わったのか？そんな思いで、東北に向かった。

①福島原発の近くまで行った。帰宅困難地域では、バリケードがあり、物理的に家に入れなくなっていた。汚染された土壌の除染作業。積み上げられた汚染土壌。これから

この土壌はどうするのか？ フィンランドのオンカロを思い出した。

②大川小学校。

小学生たちがいた校舎を津波が襲うと、こうなるのか。

校舎のあるがままを見ると、津波への恐怖心が芽生える。夏に行く海が見せる波とは、まったく違う。

③南三陸防災庁舎。大川小学校から南三陸町まで、車窓からは、コンクリート工事。川の兩岸にコンクリートの土手を作っていた。何か、違和感を感じた。

南三陸町の防災庁舎も、何かレプリカみたいになっていたし。川はただ水が流れているかのようになってしまうていたし。

生物の生態系はどうなったのか。生き物の生態系を犠牲にして、しっかりと川の下までコンクリートで固めて、津波の被害を減らすようにしたのか？どのような経緯で、今の姿があるのかわからないが。これが、復興の形なのかと思う。

2 日目

陸前高田の津波伝承館。南三陸防災庁舎で感じた違和感を再度感じた。それは、町全体に対しても。

2011/3/11 地震によって、津波によって、原発事故によって、多くの人が、多くの〇〇を失ったと思う。人でもあるし、職でもあるし、家でもあると思うし、人それぞれ様々なこと。命ギリギリで、逃げ延びて10年間。街が変わることが復興なのか？コンクリートで、護岸工事をするのが復興なのか？莫大なお金・人を導入して作ることが復興なのか？

自分の中で、10年という節目に東北を見てきて、「復興」って何なのか？を考えることが必要だと思った。

また同時に、様々な関係者の人たちに「復興」ってなんですかと、少し嫌な気持ちで聞いてみたくなった。

今回の道中、僕が見てきた日本で難民申請をしている人達のことを考えずにはいられなかった。命ギリギリで逃げてきた。国の、地方自治体の、人の対応がこうも違うのか。

一方では、莫大な税金が使われ、多くの人が動き。そんなことを歯がゆく、怒りさえ抱くように感じた。

今回の研修をこれからどう生かすかは、まだ整理しきれないので、取り急ぎ感想のみ送らせていただきます。

No. 24 TK様

東北視察の感想

・概要

1 日目：福島原発帰還困難地区を抜けて震災・原子力災害伝承館、石巻 大川小学校跡地、南三陸町防災対策庁舎、気仙沼のホテルへ

2日目：岩手 陸前高田 東日本大震災津波伝承館、松島

・所感

真理子さんを始め大里の皆様が支援活動を通して知り合った方々の生のお話を電話や直接お会いして伺う機会があり、その力強さや笑顔に逆に力を頂いてしまった気がします。

震災当時 TV で常に報道されていた気仙沼は一面新築の建物が立ち並んでおり、私個人としては復興を一番実感しました。(福島原発伝承館もそうですが所々そんな立派な建物立てる必要ある?と思いましたが。)

原発の伝承館については、津波の状況や原発の仕組みから見た災害状況を展示・説明していましたが、伝えるべきものが大きく抜けていると感じました。小綺麗すぎます。

原発災害は人災であり、伝承館に来た人が哀しみだけではなく、反省や怒りと言った感情も抱かなければ伝承という意味では半分の役割しか果たしていないのかと。

原発の利用を決めたのも人、福島に誘致をしたのも人、地下の予備電源の設計をミスしたのも人、ここまでの津波を何故か想定しなかったのも人、それらにGoサインを出してしまったのも人、技術が発達したのにも関わらず被災まで気付かなかったのも全て人です。時代背景も含めどういう経緯でこうなってしまったのかを吐露し伝承しないと、原発はなくとも似た過ちを繰り返してしまうのではないのでしょうか。

今調べたら丁度先月 9/30 に 仙台高裁で国と東電に対し、被災者原告 3550 人に計約 10 億 1 千万円を賠償を命じる二審判決が下っています。

以下抜粋です。

『上田裁判長は判決理由で、国と東電は原発に大津波が襲来することを予見でき、事故を回避し得たと判断。

「国、東電とも経済的負担の大きさを恐れるあまり、津波の試算自体を避けようとした」と批判した。

政府機関が 2002 年に公表した地震予測の「長期評価」に基づいて試算すれば、02 年末の時点で海拔 10 メートルの敷地を超える津波の到来を予見できたと指摘。その後、津波による浸水の危険性が認識されるようになったとして、対策の先送りを許した国の権限不行使は 06 年末の時点で許容限度を逸脱し、違法だと認定した。』

最高裁が終わったら、伝承館に裁判記録の展示スペースが出来ることを切に願います。

以上です

NO.25 KSさん

東北研修感想

・東日本大震災津波伝承館(陸前高田市)

ペしゃんこになってしまった消防車の実物が入ってすぐであり、津波の破壊力を感じた。映像では地震後の救援を受けるための対応が流れていた。地震の余震があるなか瓦礫で塞がれた45号線の瓦礫を撤去し全面開通させた。

この迅速な対応が、支援物資を受けるためには欠かせなかった。自衛隊の車両の交通、緊急車両(病院への)にも貢献した。

今年の台風でも孤立した地域が話題となっていたので、津波以外の災害でも「道路開通」が復旧へのポイントになると思った。

また、被害がなかった地区や学校の事例のパネルがあり、共通しているのは「事前の準備が万全だったこと」。非常時には普段できていること以上のことはできない。備えやいざという時の準備が大切で、自分達がどれくらい準備できているのか振り返るきっかけになった。

高田松原津波復興祈念公園が整備中で、軌跡の一本松へ向かう道の途中では高台からきれいな海を眺めることができる。海を一望できるところの転落防止の囲いはガラスで作られていて、海を見たときに、海と陸側の一体感を感じた。後から知ったが「いのちを守り、海と大地と共に生きる」をテーマになっている。

「津波を正しく恐れ、海と共に生きる。」

自然が豊かな海とともに生きている私達も大切にしないといけないことだと思った。

・東日本大震災遺構・伝承館(気仙沼市)

冒頭13分映像が忘れかけていた10年前の光景を思い出させた。それくらい強烈な津波、人の叫び・嘆きの映像だった。

気仙沼向洋高校の校舎は10年前のあの日のままだった。3階の床は地上約8メートル、ベランダを破壊しながら突っ込んできた車は、津波のすさまじい力を感じた。津波による浸水が約12メートルまで達したことが建物を回っていると感ずることができた。

被災物そのものを見ることが出来るこの施設は、スタッフも震災遺構の柵内に

は、立ち入らず、手も触れないとのこと。

気仙沼向洋高校にいた約 170 人の全員が無事だったことは奇跡的。「日頃から防災意識が高い学校で、避難訓練をよくしていた」といわれていて、学校だけではなく地域防災・会社防災の観点からも大切なこと。個人的には訪れて欲しい遺構のナンバーワン。

・大川小学校(石巻市)

津波で児童・教職員計 84 人が犠牲となった旧石巻市大川小は震災遺構として保存するための工事が始まっていた。敷地内は施設の建設をしているため、山側を大回りして大川小学校を見て、この山を登っていれば。。と感じた。施設は 2021 年 3 月に完成予定で、被災校舎を現状のまま残しながら周辺に展示施設や広場を整備。震災の教訓を後世に伝えていくとのこと。完成後改めて手を合わせに訪れたい。

この 10 年で変わったこともあれば、変わらないこともあった。

宮城県や岩手県は復興(広義で)が進み。浪江町や双葉町はあの時から時が止まっていた。近づくにつれて、すれ違う除去土壌のダンプ車が増えていく。

「これより先帰宅困難区域」の看板は数年前に来たときと変わらないが、放射線の計量看板は減った気がする。

10 年前と比べて、それくらい放射線量が下がっているのだと思う。6 号線沿いのバリケードフェンスはいつになったら撤去されるのだろうか。(20 年後? 30 年後?)

色々な施設を見た中で感じたのは、万が一被災したときは、自分達でやることをやり、誰かに頼るのではなく特に初動は自分達で物事を前に進めていくことが大切で、地域防災として万が一の想定や避難に対する準備をしておく事が減災につながると感じた。

No. 26 YN様

東北を見てきて

地震と津波で壊滅的な被害を受けた町は、10 年という歳月を経て、復興しつつあり、各地に震災の事を後世に伝える「伝承館」が建てられていました。伝承館は整備された土地に新しく建てられ、道の駅と、併設されているもの、被災した建物の脇に建てられているものなど色々です。どの場所でも共通して言えるのは、展示物、映像記録を見ることで、当時の記憶を鮮明に思い出させてくれることです。忘れかけていた、忘れようとしていた津波の映像。当時テレビで見た津波に町が飲み込まれる光景に衝撃を受けたことを思い出します。

伝承館には修学旅行と思われる学生が来ていました。彼らは震災当時はまだ幼かったはず。ここに来て何を思うのか？リアルに感じる事ができるのか？経験したことの無い事を私達は伝えることができるのか？

大昔の人も自分達の住む場所におこる災害の事を、碑石や地名として残してくれていたはずです。それを無視して開発を続けてきた今を生きる人。この震災のこともいつか忘れられてしまうのでしょうか。

陸前高田の伝承館で救助活動や避難誘導していた消防団員が90人近く亡くなったと書かれていました。自分も消防団に入っているのです、災害時には出動することになります。目の前で助けを求める人がいたら？助けに行くことで、巻き込まれ自分も死ぬかもしれない状況だったら？

消防団では団員の安全は優先されます。危険な状況なら無理をする必要はありません。けどその時に助けられるのが自分しかいなかったら無理をするのだと思います。使命感に駆り立てられるのだと。きっと自分もそうだと思います。

大川小学校

いつもは朝イチで行く場所でしたが、今回は夕方に行きました。北上川に沈む夕日が水面に反射して、とても綺麗でした。ここに通っていた子供たちもこの景色を見ていたのでしょうか。その川を津波が遡上し学校と子供たちを飲み込んだこと。いつ訪れてもなんとも言えない気持ちになります。

福島第一原発

帰宅困難エリアは10年前で時が止まっています。一度も見たことがない人は行くべき場所です。同じ日本とは思えない光景は、映画の中のような雰囲気です。理想の方向かどうかは分かりませんが、復興を遂げている津波での被災エリアと違い、どうにもできない放射能の恐ろしさを感じます。ギリギリ帰宅できるエリアの田畑には広大なソーラー畑が広がっていました。これが震災後に作られたものだとしたら複雑な気持ちです。

原子力というクリーンだけど、危険を伴う技術。危険は伴わないが、里山の景観をぶち壊し、土地を痛めるソーラー畑。反原発の結果壊されていく里山の景色は日本中にあるはずです。

地元長南も工業団地より広い面積の山が切り崩され、ソーラー畑へと変わりつつあります。その結果山の保水力がなくなり、今年の台風で町に甚大な被害がありました。

ソーラー畑の付近の道路に水が溢れるのは、山を崩した事が無関係とは思えま

せん。原子力か自然エネルギーか？極端な2択以外の方法はないのでしょうか？

東北を改めて見て思うことは山のようにあります。自分にできることは何か？当たり前前の日常の記録を残すことはできるかなと思います。記録が無ければ、変化した後の日常が当たり前になってしまうので。

後書き

大里に入社する前、憲一さんと松本さんが運転する東北支援バスに、乗って初めて東北ボランティアに行ったときの日記が当時やっていたmixiに残っていたので、それを下に乘せておきます。震災から一年たった6月ごろのこと。22才大学4年生の時です。

am6:30

大川小学校前

山間の道を抜けて目の前に現れたのは、広い野原と何か大きな建物の廃墟。もちろん廃墟とは大川小学校。74人児童が無くなった悲劇の場所。信じられない。肉眼では海は見えないこの距離を、校舎がほぼ全壊する程の津波が来たなんて

小学校前にはお地蔵さんやお線香をあげる場所、そしてたくさんの花が置かれていた。僕たちもお線香をあげる。

ふと脇を見ると、津波に飲まれる前の小学校周辺の航空写真が飾られている。写真を見ると小学校の周りには民家がたくさん建っていた。

嘘だろ……

そして、小学校のすぐ裏手には小学生でも何とか登れるであろう山がある。この山に登っていればな、巨大な津波に吞まれる瞬間彼ら彼女らは何を思ったんだろう？

脇を流れる川には鉄橋の残骸が沈んでいた。小学校を後にした僕たちは、石巻前網(漢字が違うかも)地区に向かった。前網への移動中海沿いの道を通る。住宅街を抜ける。ここもまた異常な光景だった。一階が崩壊したアパート。廃墟のガソリンスタンド。穴だらけになった民家。鳥居だけ残った神社の跡地。陸にある船・浮。基礎だけ残った建物。建て直された家。抉られた山肌。間近で見るとそれらはニュースで見るより、悲惨に見える。これが現状をだと思い知りました。個人的にね、一番気になったのお墓なんだ。

昔からあるであろうお墓と同じかそれ以上に、真新しいお墓があるんだ。

仕事場に着いた僕たちがやった作業は、定置網で使う重り作りだった。イメージ的には“土嚢”を作る感じかな。現在10時30分、バスが迎えに来るのが約2時。現地の漁師さんと協力しながらみんなで作った。

これが中々の重労働。僕は問題なかったけど、参加者のほとんどはお年寄り、女の人もある。この作業をしてお金がもらえるわけじゃない。きつい仕事。でも、ひたすら作った。たくさん作った。お昼を挟んで午後からも作った。作った。作った。作った。2時になった。バスは少し遅れているらしい。僕たちの契約時間は2時まで、その先は手伝う必要はなかった。日中の慣れない労働でみんな疲れていたはず。なのに、誰も手を止めなかったんだな。80近いおじいさんも、女の人でも誰も泣き言を言わなかった。バスが来たときには、今日用意されていた袋全てに砂を詰め終わっていた。

その数1200個。僕たちが来る前に作られていた数百個と合わせて、定置網2つ分になるらしい。

「ありがとう」。帰り際に漁師の方から言われた一言。とても温かく、心に響いた。漁師の人は言っていた。

津波で港や船が破壊されたあと、この先どおしたら良いのか分からず困り果てていたという。けど、多くのボランティアの人に支えられて、今では未来に希望をもって今を生きていけると言っていた。

震災から1年経って、僕の中ですでに過去の話しになりつつあった震災の記憶ニュースでも段々取り上げられなくなり、復興したのかなと思っていた。

昨日の日記で書いた、“僕の被災地への認識”はそれだったからだ。淡い希望は消え去り、現実は無残だった。こうして被災地に行ってみると、まだまだ終わっていないと思った。自分に出来ることは何かないか？

ボランティアはまだまだ必要とされています。まだ行っていない人は一度行ってみると良いですよ。何が起こったのかを肌で実感できますから。

No. 27 NY様

初日に向かった場所は岩手県陸前高田の軌跡の一本松、東日本大震災津波伝承館です。一本松は枯れる事なくあの頃の儘で、被害にあった建物も変わらぬ状態でした。

次に気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館、水産加工高校の跡地です。此方では津波の映像を見て気分が悪くなる程辛い感情が伝わってきました。内部や外部も震災当時の面影が残っていました。貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。

No. 28 Y T 様

行きの車の中震災当時の話をして、後藤さんが、当時勤めていた職場が火事になり、2か月間休職になったことや、飯高さんが、家に戻ってガス釜でご飯を炊き、みんなに振る舞ってくれた事を知りました。

原子力災害伝承館（双葉町）に行って、広野のインターチェンジを過ぎると、線量計があり、0.1~2 マイクロシーベルトを記録していました。震災前は約0.02 マイクロシーベルト位だったそうです。

常磐大熊インターを降り、伝承館に向かう途中、少し町中を通りました。すれ違うのは工事車両ばかり、ほとんどの道は帰宅困難地域の看板とバリケードで塞がれていて、主要な道には、入れないよう見張りの人が立っていました。

被災したときのまま、手を入れる事もできず荒れた町をみて、この10年間、故郷に帰れていない人達のことを思いました。放射能の及ぼした影響や、戻れるようになったとしても、元通りになるには、町をつくり上げてきた時間と同じ位にかかるだろうと思いました。

伝承館では、様々な展示を見て、当時の詳しい状況や被害の大きさを改めて学びました。

- ・津波で、電源が使えなくなり、燃料を冷やすコントロールが効かなくなり、爆発が起こった。
- ・震災が起こった数日後に、原発の事故で避難を余儀なくされ、今も帰れない人が4万人もいる事。
- ・屋内待機区域の指示があった南相馬市では、運送会社に、屋内待機区域へ入らないよう指示があったため、物流が止まり、一時、救援物資が途絶えた事。

震災があった時は高校生でした。震災が起こる1週間位前、エネルギーについての授業で、先生が特別に原発について取り上げてくれました。原発というものがあつたことを初めて知り、事故の危険についても教えてもらいましたが、あまり頭に入っていませんでした。数日後、原発の事故が現実に起こってしまったことが衝撃でした。

当時の自分は先生が特別に取り上げてくれなければ知らなかったし、事故が起こらなければ、考える事もなかったと思います。日ごろの生活や、備えを改めて見直すことと、まずは、自分の家族や子どもたちにもこの事は伝えなければと思いました。

No. 29 S I 様

福島で感じたこと

今も多くの人が帰る事の出来ない場所に3年ぶりに行かせて頂きました。雑草がのび荒れ放題の農地と思われる場所、震災で壊れたままで修理してもらえない建物は3年前と変わらず。

原発事故伝承館では当時の映像を見て原発事故の恐ろしさを改めて実感しました。避難した皆さんもまさかこんなに長い間自宅に帰る事が出来なくなるとは思っても見なかったと思います。過疎地に多くの雇用を生んだ原発ですが、こんなにも危険をはらんでいた。こんなに怖い原発に頼らない日本になって欲しい。本当に小さな事ですが電気の無駄使いに気をつけたいです。

No. 30 S G 様

東北研修感想

高速道路から見える、帰還困難区域の看板は知っていましたが、今回初めて近くを通りました。草がボーボーで柵がしてあり、瓦の屋根も、割れた窓ガラスもそのまま、4万人もの人が今も家に帰れないでいる。この人たちは一体いつになったら帰れるのだろうか?と思いました。

道路には見張人が立っていて自由に通れず、通行証が必要であることを近くで見て初めて知りました。また、あちこちで工事車両や送電線が目立ち、すごい税金が使われていることを感じました。

原子力災害伝承館では、当時の映像はもちろん、発電所爆発や、事故発生を伝える当時の新聞、海中捜索活動に使用された潜水具、基礎ごと流されたポスト、道路標識、医療機関の災害記録表、救護制服、救急セットなどがそのまま残されており、震災当時のことが蘇りました。

私ももし、家が海沿いにあったら津波で流されていたかもしれないし、亡くなっていたかもしれないと思うと、今こうして普通に生活していることが幸せなことだと思いました。地震はいつ起こるか分からない恐ろしい災害の一つであり、突然起こることが多いため、どこで遭遇するか分かりません。災害の備えもちろん必要ですが、緊急時にすぐに行動に移すための知識をしっかりと理解し、整理しておくことでいざという時に役に立つと思います。

震災を忘れないために、残された私たちにはできることは、後世に伝え続けることではないでしょうか。今回ゆっくり見られなかったのが残念ですが、連れていってくれた真理子さん、ありがとうございました。

No. 31 HM様

被災地視察

最初に行った福島 of 伝承館、原発の危険性や今も故郷に戻る事が出来ない人たちがいると言う事を他人事ではなく自分たちの事として再び同じ過ちを繰り返さない教えを伝える伝承館であってほしいと感じた。

大川小学校で生存した只野さんの事を事前に皆で共有し訪れた大川小。小学校から集団で避難する途中で津波に遭遇、危機一髪で山を駆け登り助かった事。一緒にいた姉、妹を津波で失い母親も津波で失った話を思いながら、なぜ児童たちを山に避難させなかったのか、指示待ちではなく自ら考え行動して行く力をひとりひとりが身につけなければいけないと思い、自らそして周りにも広げていこうと思った。50年100年と経った時に同じ事がおこらないよう後生に伝承していく事先人達の教え「津波てんでんこ」「ここから下に家を建てるな」も大切だと思った。

防災庁舎跡、久しぶりに訪れた防災庁舎近くにあった川は大きな堤防が造られ、防災庁舎の前に立ちほだかり周りはきれいに整備された公園となり当時と全く様子が変わっていた。最後まで避難を叫び続けた彼女は今のこの様子をどう見ているかと思いをはせた。

漁師の阿部さんの話を聞くことができた。漁師は潮の香りや波、海全体の感覚で判断する事が沢山あるのに海を近くに見れなくなった。ここに住んでいる人達は皆覚悟している。1000年に1度の津波の為に50年しかもたないコンクリートの壁は必要ないという言葉にその通りだと思った。

気仙沼伝承館の掲示の中に海と大地と共に生きる。とあった。

コンクリートの壁を作った事で海が見えなくなった。人間が元々持っている感覚、津波到来がわからなくなるなどいろいろな問題が出てくると思った。

三陸の人たちは自然豊かな海の恩恵を受け海と共に生活してきた。その海がコンクリートの壁で見えなくなってしまったこと。自然豊かな風景が盛り土で様変わりしてしまったこと、河川も、コンクリートで囲まれてしまっていた川が多くあったが、阿部さん達の関わった川は川底に岩をしき生態系を壊さない配慮をするよう行政にかけあいコンクリートじきにはならなかった事等を実際見聞きし、人任せではなく自分たちの考え、意見をきちんと持ち伝えていく事が大切だと思った。

No. 32 TK様

東北感想

今回東北に行って印象に残っている場所があります。それは、大川小学校と南三陸さんさん商店街にある写真館です。

大川小学校では多くの命が無くなりました。74名の小さい命が無くなり、親にとって朝元気に登校した子供がその日命を落とすなんて想像しなかったと思います。

写真館では震災前と震災後の写真があり震災後の写真は家とかが津波で流され何も無くて津波は怖いと思いました。ボランティアとして積極的に参加し東北の人達に「ありがとう」「助かる」「また来て」と笑顔で言ってもらえて少しでも力になれる様にしたいです。

No. 33 K T様

東北の見聞録

意味が分からないと思いますが、雑観を送ります。被災地で自分の考え方の前提を考えた過去と今と未来の、永遠に終わらない微調整の上で進化・発展してきているということ。

今の時代の自分たちが最良の判断ができるという考えは変だと思うこと。多数派は正しいから多数派、だから乗っかって安心という変な思い込みに嫌気がさすこと。

福島伝承館をみて

規模は違えど、熊本の水俣病資料館に重ねた。原因の水銀を海に流したチッソは、行政の誘致で水俣に来た。でもそれが原因で謎の症状が多発。チッソも行政も公にしようと思わず、公害の認定が取れてからは原因と補償と再発防止を伝承していく施設として資料館を設置。比較してみると成り立ちは近いが、福島伝承館の事故に対する覚悟の足りなさを感じた。もちろん当時の現場は大混乱の中で、各自ができる最善を尽くしたのだろうと思う。それで結果はどうだったのか？反省としての対策は？どう統括したのか？増え続ける汚染水の問題は？事故処理にかかる費用と時間の問題は？海洋放水によって支援に駆けつけたアメリカ海兵が白血病になっている問題は？次々と出てくる課題に向き合って、未来に繋いでいける伝承館であってほしいと願うばかりだった。

個人に落とした時

正しいと思っていただけ間違ったときに、間違っていると言われて気が付いた時に、自分はどうするのか。潔い立居振る舞いのできる大人でありたいと思った。これがいけなかった、あれがダメだった、それならこうしよ

う、など原因を単純化して受け止めようとする時に立ち止まるクセを持つ
うと思った。

あれから。自分たちは、被災地は、世の中は、どう変わったのかを、うち
の親は(うちのおじいさんは)よく話してくれたと次の世代に言われるよう
に伝え続けようと思った。

No. 34 MT様

震災 10 年陸前高田から福島原発まで海岸線をみてきました。それぞれの
地域に津波の伝承館があり遺構が残されていました。

伝承館の大きさや設備はそれぞれですが、特に気になったのは双葉町の原
発事故伝承館で素晴らしい最新の設備で素晴らしい建物ですが、原子力の
本質を知らせるものがありませんでした。

10 年になる今もその時のままで自宅に帰ることができない人達が 4 万人も
いるのに事故の教訓が伝えられていないのが残念でした。その先陸前高田
高田まで海岸がコンクリートの擁壁が出来てありました。高さは低いところ
で 3 メートル高い所は 16 メートル海のすぐ近くの道からは海は見えなくな
ってしまいました。私達が見たところだけで約 300km 約半分の距離です
が膨大な国の予算が注ぎ込まれているのだと感じました。良し悪しは別と
して確実に復興は進んでいます。今回変化の様子を見て残念な事も有ります
が、新しい息吹のようなものを感じました。

No. 35 YH様

「あれから 10 年私たちは何を学んだか」～10 年目の被災地を視察して～

2020 年 12 月 7 日、野老真理子さん運転の車に乗せていただき総勢 4 名で東日
本大震災の起こった地に向かった。道中東京方面に向かう大きな鉄塔と太い送
電線を多く見た。これらも一言野老さんの説明がなかったら見落としていたと
思う。自分が電気の恩恵を受けているのに・・・。

最初に大川小学校を訪れた。校庭に避難していた児童と先生、近隣から避難し
ていた人々、その人たちが津波に飲まれて亡くなってしまったところだ。地震
が起こってから津波が来るまで 50 分の猶予があったという。亡くなった児童の
遺族により裁判が起こされた。

私は、この地震で訴えられた市も県も疲弊しており、なおかつ復興に時間も人
もさかなければならないときに、裁判を起こしたことに、驚いた記憶がある。
今回、野老さんが解説してくださった。「学校により児童が無事だったところと
そうで無かったところがあった、これを分けたのはなんで有ったか？」遺族は

それを知りたかったと。この裁判により、なぜこの小学校の校庭に避難していた児童を含め多くの方が亡くなったか。その原因が明らかになった。しかし地域と学校の絆は無くなってしまったようだ。

今から過去のことを言うことは簡単だけど、この結果から自分ごととして何ができるか、これが今回の旅のテーマだったはず、何ができるか？自分？時間的猶予が50分あった。裏山もあった。当時は余震もすごかったろう。指揮命令系統が弱かったようだ。校長先生はおらず教頭先生が実質トップだった。

教頭先生は、学校では一番多忙だ(以前教育現場でも勤務したことがあるので、その経験から)、しかしトップとして采配を振るう経験は少なかったと思う。ただ、命を救うということを第一に考える、そこが有ったのか？過去からの学びは、危機が迫っている時、危機に関して敏感でないといけないこと、危機に直面したら、生きるために動くには、たえず考え続けること、行動に落とし込むこと、心を決めておくこと、そこを自分ごととして無意識でも体が動けるようになりたい、ならなければ・・・、そう思った。家庭内で同居する家族、どう行動できるか、シュミレーションしてみる。家の中で用意できる備蓄品(水、保存のきく食料品、携帯バッテリー、お気に入りの本)を平時に用意しておく、車にも同様のものを用意しておく。車のガソリンは半分を切ったら満タンにしておく。身軽になっている。年齢とともに自分に必要なものだけの生活を送るよう心がける。

大川小学校を後にして、南三陸防災庁舎とさんさん商店街を見、東日本大震災原子力災害伝承館を見、福島第一原発の建物を外から見た。双葉町の帰ることが許されていない地域、住宅が建っていても人が入ることのできないところも走っていただいた。家々は草ぼうぼうの中静かに立っていた。川の堤防工事がされていた。海も防波堤の工事がされていた。

自然の生態系とか景観は二の次でいのかな？命には心の栄養も必要だと信じる。美しい景色、適度に人の手が加えられても、生態系が保たれる環境、そういうことを願いたいと思った。実際に現地を見て感じ考えることのできた貴重な一日でした。野老さんはじめご一緒できた皆様、ありがとうございました。ご縁に感謝です。

No. 36 HO様

あれから10年、私たちは何を学んだかー10年を経過して思ったこと

4年ぶりに、復興状況はどうなっているのか被災地を見て回った。車の中で、野老さんから10年前のボランティア状況を聞いていると当時の行動が色々と蘇ってきた。避難所での物資運び、がれきの撤去、送られてきた物資(食料、衣服など)の仕分け、土嚢作り、バスの中で学んだ傾聴の仕方、立ち位置が良く分か

らず必至でやるだけだったが、現地のボランティアスタッフと色々と話をしているうちに自ら行動することの大切さを学んだ。ボランティア活動を関わって頂いた多くの人に、本当に感謝している。

被災地の石巻では仮設住宅はなくなり、公園に生まれ変わっている。

凸凹だった海岸の道路は整備され、かさ上げの上の道路に変わっている。そして、あたり一面 10メートルと大きな塀が建設されていく。風景は大きく変わっているが、人間が生活するために必要なことなのだろう。

南三陸町の防災庁舎周辺は、巨大な復興事業が行われており、立派なモニュメントが出来ている。あまりの変貌に戸惑ったけれど、整備された後は、段々と人が集って街が形成されるのであろう。双葉町の 10 年前と変わらない、帰宅住宅状況を見て、空しくなった。

双葉町にある伝承館には、当時の緊迫した状況と原発の事実が克明に展示されている。入場者に、何を伝えたいであろうか？

あれから 10 年たち、昨年台風 19 号で、災害は身近に起こることを実感した。将来、関東地域に巨大地震は必ずやってくるだろう。

私たちは、何時起こるか分からない地震に対して常に準備しておく事は勿論だが、最も大切なのは、自然災害の要因と考えられる地球温暖化防止対策、CO₂削減をそれぞれが生活の中で、実行することが重要だと思う。子孫に安心・安全な環境を継承するために！

No. 37 A S 様

東北被災地視察ツアー感想文

先日は東日本大震災その後 10 年の現状及び復興度視察ツアーに参加させていただき、ありがとうございました。福島原発地域、気仙沼、陸前高田を訪れ、各地の今の姿と伝承館で見た当時の惨状を見比べて復興の過程を想像することができたことは、大変貴重な体験でした。

原発未帰還地域では、各家々の出入り通路に設けられた冷たい鉄格子が死んだような町の中でもひとときわ悲しい存在でした。又、先生、生徒約 70 人の死者を出した大川小学校の被災地に立った時、指導者の判断ミスから多くの命を守りきれなかった無念さを思い、何ともやりきれない切ない思いを致しました。なぜ”津波、高台、一刻も早く”の鉄則にさからい、真逆の判断をしてしまったのだろうか？と・・・嵩上げされた道路など、復興は進んでいますが、川はコンクリートの堤防によって封じこめられ、海はそそりたつ 10m のコンクリートの壁によってさえぎられ、美しい東北の海や川はすっかり姿を変えました。これらが最善の防災なのか、自然との調和をはかりながら、愛ある施策はなかったのだろうか、疑問の残る景観でした。自然を抑えこむことは、自然との共

生に反します。

No. 38 SN様

2011・3月11日・東日本大震災の10年後・を野老真理子さんから見てみませんかとの声かけで、7日(月)に4人で、朝4時に大里を出発、福島に入り帰宅困難地域を通過していると、自宅に戻れない様にあちこちが封鎖されており、辺り一帯新しい住宅が並んでいるのに、私から見れば死んだ町・寂しい町・悲しい町に様変わりしていて、今、現在も汚染土の処理をしていて黒い大きな袋がとてつもなく並んでいた。今も処理をして下さっている皆さんにお礼と感謝しかありません。

帰宅出来る地域は住宅・お店も有り明るくその差を感じ得ませんでした。道中で見たあらゆる大・小の河川敷はかさ上げされ今も堤防工事が進んでいた。私達が通過している道路もボランティアをしていた10年前はでこぼこしていたが、かさ上げして綺麗に補修されていると野老さんと大野さんに聞きました。石巻市の旧大川小学校震災遺構に立ち寄り、避難する前の話を聞き、てんでんこが生かされなくて児童74名・教職員10名が犠牲となった今では尊い教訓となった。南三陸に立ち寄り「南三陸の記憶」日常の生活風景・津波に襲われたあとの情景の写真が展示されてるのを見学。

写真を撮っている佐藤信一さんはどんな思いで震える心でこの地獄絵をと思うと心が傷みました。被災した防災センターを見ると鉄筋で出来た外階段がグニャリと曲がっていて、津波の凄まじい勢いの流れを感じました。この場所は南三陸町震災復興記念公園として今も工事中でした。その上の土地に南三陸さん商店街として・魚・食堂・お土産屋さん建設されていて新鮮な物ばかり。このコロナ渦で私達を含めお客さんはマバラでした。これからは町民の皆さんと旅行者の心の寄り所になってくれればと願いました。

最後に福島の伝承館に向かったがプロローグはアニメーションを効果的に組み合わせた映像となっているそうだが、当時のこんなにも酷かったのかと思う生々しい臨場感が伝わって来なかった。展示コーナーは他の場所ともそう変わらないと思った。地震・原発・津波に会われ先祖代々大事に守ってきた土地・海・家そして毎日眺めていた海の情景・川の情景・山の情景、家族の団欒を一瞬に失ってしまった、住民の皆様の無念な思いは計り知れません。10年立った今でも国が行っている復興工事が、まだこんなものだったのかと思ひ被災された方達の、日常生活に戻るにはあと何年掛かるのだろうと思ひを馳せ、帰路途中に私も心が傷み涙が滲んで来ました。私達はどうすれば良いのか難しい問題だなと思ひました。

No. 39 KU様

野老真理子様

こんにちは。

私が1番印象深く思っているのは道の駅高田松原と津波伝承館です。理由として、私が所属している大学のゼミは毎年陸前高田市に訪れて農園の方や水産会社の方と交流させていただいていましたが、今年はコロナウイルスの影響でどうしても現地に足を運ぶことが出来なかったからです。その代わりにオンラインゼミ合宿というものを行ったのですが、その時に担当した事業所が道の駅高田松原でした。当日実際に足を運んでみて道の駅の統括マネージャーである大森さんと直接話をすることが出来ました。また、1番迫力があつたのが津波伝承館でした。映像が流れていて当時のリアルな状況が伝わり、建物内の展示物なども直接見ることが出来、壊滅的な状態が伝わりました。現地の方でもまだ津波伝承館を訪れることが難しいとしている人もいるというのをお聞きしたことがあり、その意味がわかりました。

津波の恐ろしさというものは普段埼玉県に住んでいる私の生活では感じる事ができません。そんな中でコンクリートづくめになっている状況を見て生態系を無視してでもやる物なのかと目を疑いました。もうあの美しい景観を見ることが出来ないで現地の方々は思っていることでしょう。また同じことを繰り返してはならない。現地でも未だに作業をしている人がいる中で他県に住んでいる私たちにできることはあの時のことを忘れず、来年10周年とある意味区切りのいい時に思い出したり、現地に行ける人は行ったり、とできることはあるはずです。私も来年のゼミ合宿では実際に現地に訪れて当時の状況を詳しく聞きに行こうと思っています。この度は、貴重な経験をさせて頂き、誠にありがとうございました。この経験が無駄にならないよう、普段の学習に生かし、私の将来に対して繋げて行けるよう努力して行きます。

No. 40 KI様

朝4時に大網白里市を出て夜9時に帰った。往復1000キロの移動であったそうである。前日の夜に会議があり、3時間程の睡眠で、終始ボーっとしていた。今は翌日の午前10時、我が家の上空は青空のみが広がり、そこには、休日にはエンジン付きパラグライダーが見られる。今日は一羽の猛禽類が遊弋し、榎の大木の梢には一羽のカラス大声でけたたましく鳴いている。私は庭木の剪定で梯子にのっている。

昨日は福島県大熊町、浪江町、宮城県石巻市、南三陸町に確かに行ったはずな

のに、夢だったのではないかという感じがどうしてもしてしまう。おそらく濃密な日常とは全く違った一日であったせいだ。

野老会長以外、当日会ったばかりの方々と男女7名で、ほとんどの時間を小型バンの中で過ごし、視察先でもほとんど一緒に行動した。リタイアした高齢者の私にはなかなか無かった体験だった。

私は震災後間もなく、連絡のとれない友人をたずねて、福島県の南相馬市に向かったことがある。一旦、仙台まで北上し、電車とバスを乗り継いで被災地域を南下した。まだ一部しか片付いていなかった生々しい被災地の様子を記憶している。また2020年までに、南相馬市で何度かボランティア活動をして、回復していく姿も目撃してきた。それでも10年後の被災地視察は非日常の濃密な時間になった。

最初に車から降りた視察地は石巻市立大川小学校跡。自分の中では原発事故汚染地域とともに、大変な悲惨な被災地という認識だ。

北上川のかさ上げ工事済みの堤防の道路が山裾を右に曲がると校舎が見えた。小さい！見えた瞬間、亡くなった74名の子どもが想われ、胸にこみ上げるものがあった。心の中で「ばかだよ、ばかだよ」「ごめんな、ごめんな」と繰り返していた。

犠牲者の1人当時6年生の鈴木真衣さんのお父さんが語り部として、私たちに当時のことを話してくれた。いち早く裏山に避難した子は叱られて戻され、懸命に裏山に逃げようと提案した子も無視された。

裏山は雪があったとしても十分登れる傾斜だ。なぜ50分間も校庭に整列させていたのだろう。

裁判では明らかにならなかった事実をも含め全容を明らかにし、真摯に反省しないとまた同様の悲劇が繰り返される。今のままでは子どもたちにさらにさらに申し訳ない。合掌。

南三陸町志津川の写真のこと、海岸、河川のコンクリート化のこと、浪江町請戸の10年前そのままの姿の無住の帰宅困難地域に、道路と敷地の除染をしてつくられた原発事故の伝承館のこと。これらのことは参加者のだれかが書いてくれるでしょう。長くなるので割愛します。

最後に当日の参加者の皆さんありがとうございました。特に野老会長にはガイドと運転、朝食の用意までしていただきました。小林さんにも運転していただき無事に帰って来ることができました。

No. 41 MK様

今日はありがとうございました。

原発事故で止まってしまった街。日頃の防災に対する意識で明確を分けた二つの小学校。たくさんの命が奪われた震災ですが、これを教訓に再び同じことを繰り返さないのが私たちが考えることだと思いました。ありがとうございました。

No. 42 RK様

まずはこのような貴重な経験をさせて頂いたことに心より感謝申し上げます。野老会長の熱い思いで100名の動員をやりきる覚悟と実践力に深く感銘を受けました。丸一日同行させていただき、視察そのものはもちろん、野老会長の生き方、在り方に大いに刺激と勇気をいただきました。ありがとうございました。

【大熊町・双葉町・浪江町】

5年ぶりに伺い、車窓から見る景色はこの10年時が止まり・・・いえさらに衰退した様子を肌で感じ5年前のやるせない気持ちが蘇りました。

【大川小学校】

以前とは印象が全く違い、月日の流れを感じました。

授業でも使われていた裏山(ここにいれば救われていた)に逃げた生徒を連れ戻した大人の判断にはどんな思いが働いていたのでしょうか・・・それによって命の行方は・・・。また、タイミング良く娘さんの命を持っていかれた父親の語り部を伺うことができ、そのシーンが浮かび、涙がとまらなくなりました。車中でご一緒した教師を経験された方から出た「大人の責任・大人が学ばなくてはいけない。」という言葉が胸に刺さりました。知らないこと、学ばないことの自己責任を自身に問いかけながら、知ってもらふ発信力を高め、学びの場の提

供が私の今後の課題であることを認識いたしました。

【佐藤信一写真展示館】

シャッターを切っているときの佐藤氏の心情が手に取るように一枚一枚に魂がこもっていました。そのストーリーは自分の街に対する愛が溢れていて心をわしづかみにされました。

【南三陸防災対策庁舎跡】

街を、街の人々を守る使命感は想像を絶します。レガシーとして残す。綺麗に整備された跡地を見ながら時の流れを感じました。

【防波堤】

海が見えなくなり、機械的に作られた印象が強かったです。視点によって完成形が変わる。住民の思いと、政府の復興対策、そこに関わる利権の温度差を感じてしまいました。

【原子力災害伝承館】

あの周りの環境の中でぽつんと立てられた立派な伝承館。率直に申し上げると違和感を感

じました。伝えるのは大事な事。ただその「伝承」の目的は何なのか？事実は伝えている。それ以上に大切な、関わった方の背景や次世代に伝えたいメッセージ性があれば、もっと意味のある伝承館になると感じました。

No.43 TK 様

東北視察の感想

・福島県・双葉郡

私は大学生です。今回の東北視察へ参加したきっかけは昨年大学で震災復興を題材にした授業を受けたことです。この授業を通して、福島第一原発周辺地域の復興がいかに進んでいないかということを知りました。

そして今回双葉郡の現在の姿を自分の目で見て、原発周辺地域の中で事故の起きた日から時間が止まったままの地域が未だに存在しているということを実感しました。至る所にバリゲートが設置されていました。

農地の上には放射性廃棄物が入った袋が大量に置かれていました。コンビニの駐車場には草木が覆い茂っていました。とてもすぐに人が住むことができる場所ではないと思いました。

原発事故が起きれば、町が死ぬということを改めて思い知らされました。

原発について考える時、この地域の光景無しに語ってはいけないと個人的に思いました。一方浪江では道の駅ができていました。来年には新しいお店がオープンする予定らしく、原発周辺地域でも新たな町づくりが進んでいる地域が存在することを学びました。原発周辺地域が一律で復興が進んでいないという認識を改めることができました。

また「東日本大震災・原子力災害伝承館」にも訪れました。事故当時の状況、避難所生活の実態、復興に向けた取り組みなどを学ぶことができる施設だと思いました。ただ、個人的に事故が起きた日から現在までの避難者の動向についての内容が欲しいなと感じました。原発事故について知るためには、この伝承館を訪れるだけでなく、伝承館周辺の地域の光景も見る必要があると思いました。

・宮城県・大川小学校、防災対策調庁舎

大川小学校はニュースや写真で何度も見たことがありましたが、校舎を実際に自分の目で見ると改めて津波の威力を実感することができました。またタイミングが良く、遺族の方のお話を聞くことができました。

自分の子供が津波で命を奪われた悲しみを、子供の遺体を見つけてもすぐに家に連れていくことのできないもどかしさを聞くことができました。そして同じような悲しみを背負っている遺族が大勢存在するということを考えると、当時の大川小の教員が犯してしまったような判断ミスは二度と繰り返してはならないと強く思いました。私も緊急地震速報が鳴った時、驚きはするものの、心の中ではどうせ大丈夫だろうと考えてしまいがちです。この「どうせ大丈夫だろう」が積み重なると、いつか取り返しのつかない事態になってしま

うということが大川小から学びました。緊急時には楽観論ではなく悲観論で物事を考えることを胸に刻みたいと思います。

南三陸の防災対策調庁舎へ向かう途中で沿岸沿に立てられた10メートル近い壁や防波堤に囲まれた川を見ました。壁や防波堤は次なる津波に備えて必要不可欠であるということは十分理解できましたが、果たして南三陸で建てられていたような防波堤で町を津波から守ることはできるのだろうかという疑問に思いました。また防災対策調庁舎を実際に見てみると、周辺を含めかなり整備されているなという印象を受けました。もちろん何十年何百年先の人たちのために建物を保存することを考えると、整備は必要不可欠なことだと思います。しかし現在の庁舎跡を見ただけでは震災当時の悲惨さを感じることができませんでした。被災跡地を見る際は整備された建物だけでなく、当時の記録も同時に見ることが重要であると思いました。

No.44 MI様

東日本震災から10年目と言う節目にもう一度東北を見てほしいと言う真理子会長の熱い思いに、かなり鈍い反応の私も冬の東北路へ憧れも相まって1月21日木曜日参加する。東北行脚はほぼ1年のどの季節にも参加したことになる。冬の東北は奥羽山脈の真っ白な日本列島の背骨のような山山を左にして。素晴らしいものであった。特筆は福島原発の後、最初に訪れた中浜小学校。

津波当日の有り様と学校長の指導力の結果全員無事だったと言う事学校の立地30年ほど前に建てられた建物のデザインの情緒に訴えることのできるとても美しい学校で津波にやられてしまったとは言え、しっかりと原型をとどめて立っており津波の力にやられなかった木製の壁画がともしっかりと残っていて学び舎としての形にとっても感動した。90人の子供たちや教員があの日震災の当日怖い寒い1番を何とかやり過ごすことができた校長の配慮教員の心配りとを聞きとても美しい話を聞いたような嬉しさと満足感が得られた。当日の夜も美しい星空だった。と言う証言をもとに3月11日の夜空を写真に撮ろうと9年の月日を経て、やっと美しい夜空が取れました当日もこのように美しい夜空だったようです。と言う語り部の当時教務主任であった先生の弾んだ声も心に響いた。自然災害は必ずどんな形にしてもやってくるものだとして、共存共栄の人間の体験経験に基づいた想像力と創造はいつも問われることになると思う。

三陸の美しい海が壁の向こうでたまにしか望めないような沿岸風景南三陸の谷間に埋没してしまったような防災庁舎にはいきた祈りの花束は見受けられなかった。1日18時間に及ぶ行脚をしっかりとサポートしていただいた野老まさおさん、顔だけはよく知っていた桜田晴美さんとも日ごろの思いをしっかりと語り合うことができた。10年目にして記念すべき1日を過ごすことができた。ありがとうございました

No.45 HS様

昨日はお疲れ様でした。そして運転本当にご苦労様でした。おかげさまで、私はとても楽をさせていただき感謝しています。正夫さんにもお礼をお伝えください。感想文を送ります。

3.11 の記憶は、その後私たちに降りかかった台風、コロナの禍の中で薄れていく感があります。私は 3.11 直後の被災地を訪れ、これまでに見たこともない悲惨な風景を心の奥に焼きこませたはずでした。しかしこの 10 年毎日の日常を突っ走ってきた私には、その実感も忘れ、この震災で一瞬にして失われた命、生活、人生が自分の現在の生活から一掃されていたことに気づきました。

今回の 3.11 伝承をめぐる 10 年目の振り返りの旅は、目の前に広がる南三陸の美しい海岸とは裏腹の、津波の強烈な波を感じ、雪の降りしきる中での生き残りをかけた人々の一夜を感じることができました。過去の現実を貴重な遺産として心に焼き付けるための、大切な振り返りの旅であったことを記します。

記憶は消えてくことで癒されることもあり、教訓として歴史に残ることもあります。教訓をしっかりと心に焼き付け、今後の災害に備えていきたいと思いました。震災伝承の旅を企画していただき、本当にありがとうございました。

語り継ぐ事は大切ですね。

No.46 ES様

野老真理子様。いつもお世話になりましてありがとうございます。

遅くなりましたが、標記、ワード4枚の原稿を添付にて送信します。まだ間に合うと宜しいですが。それに、長すぎるかしら？原稿1枚目の、ガイガーカウンターで測った現地の放射線量の部分ですが、計測した時間と場所が地図の上と、通過地点が、地図の上でうまく確認出来ないの地図帳やネットで位置を確認しようとしてずいぶん手間取りました。手元のメモでは 8:47 に第一原発脇後田橋を通過したのに、大熊料金所を通過したのが 1 時間以上も後の 9:52 です。

第一原発脇から大熊料金所までそんなに時間がかかるはずありませんよね。

また、9:50 に「浪江ここから帰宅困難地域」を通ったあとに 9:52 に大熊料金所を通過した、としますと、何だか地図上の南と北を行ったり来たりしたことになります。その直後 9:55 に「原発そばの道」で再び高い数値をだしますが、それは第一原発の管ですから、約 1 時間前の 8:47 に通過した「第一原発脇後田橋」の近くにまた戻ってしまった後で 10:00 に災害伝承館に到着したことになります。私の中でバスの通過地点と時間が整合しなくて困りました。

野老さんがご覧になっても地点と時間の整合性がつかない、と言う場合はこの原稿から上記に関する 10 行強を削除してもよいですが如何でしょうか？10 行以上削除すればこの原稿も 3 枚に納まりますし。よろしくお計らいください